

義眼

(入れ眼)



花岡大学 作
前田晃宏 絵



とまどまき、

うら山から、ふきおろしてくる風は、
庭のつつじの白い花を、
ちろちろとゆらがせた。

ゆらぐたびに、ほんのひとまきだけ、
庭ぜんたいが、鏡にうつった景色のように、
きらっと、あかるくなる。

ただ、それっきりで、あとは、
みずうみの底のように、ひっそりとした、
昼すぎのことだった。

シズが、いとこの順一の左眼を、編棒で、突いたのだ。

突かれた順一は、けもののような、うめきごえをたてながら、縁先から、庭の青いけの上へ、ころげおち、

あ、あ、あと、身もだえした。

そのこえを、ききつけて、うらの牛小屋にいた、シズの父が、くぐり戸をあけて、あわててとびこんできた。

そして、ズボンからはみだしている毛ずねを、ぶるぶるふるわせながら、

順一の眼に、突きささったままになっている、編棒を、やっとのことで、ひきぬいた。

ひきぬいた、編棒は、血にまみれていた。

シズの父は、こわいもののように、それを、つつじの白い花のむこうへ、なげすてた。

なぜかすこしあわてていた。



すてるなり、あたりを、みまわした。

すると、すぐそばに、

まっ青な顔をした、シズが、棒のように、
つつたつたままでいる。

シズが、そこにいるのは、

わかりきっているはずなのに、

シズの父は、

ちよつと、びっくりした、ようすだった。

そして、それを、ごまかすかのように、

とてもこわい顔になって、シズにつめより、
いきなり平手で、ぱちんと顔をなぐりつけ、

「ばかっ！」

と、どなつて、かたさきを、突きとばした。

シズは、五、六歩、うしろへよろめいたが、
あぶなく、たちなおった。

だが、そんなにされながら、

シズは、そんなにされていることに、
気がついていないふうだった。

くちびるを、かたくかみしめて、

ひとことも、ものもいわない。

くるしそつに、あらい息づかいをしながら、

順一の眼から、ぼとぼとおちる血を、

やけつくような眼つきで、じっと、みつめたままだった。

わるいのは、むしろ、順一の方だったかもしれない。



順一は、縁先にすわって、
いっしんに編物をしているシズの、
おかつぱの頭の上を、ひらりととびこえて、
びっくりさせてやるつもりだったのだ。
それで、座敷の方から、
猫のように足音をしのばせて、
爪先で走ってきたのだが、
しくじったのだった。
いきおいをつけて、走ってきたのに、
シズのすぐうしろまでくると、
足のちようしが、へんにくるってしまい、
どしんと、シズのからだに、
ぶつかってしまったのであった。

ふいをつかれて、おどろいたのは、シズだ。

ふりむくと、かた先をつかんで、順一が笑っているので、

「いやっ！」

と行って、からだを、くねらせた。

そして、そのひょうしに、

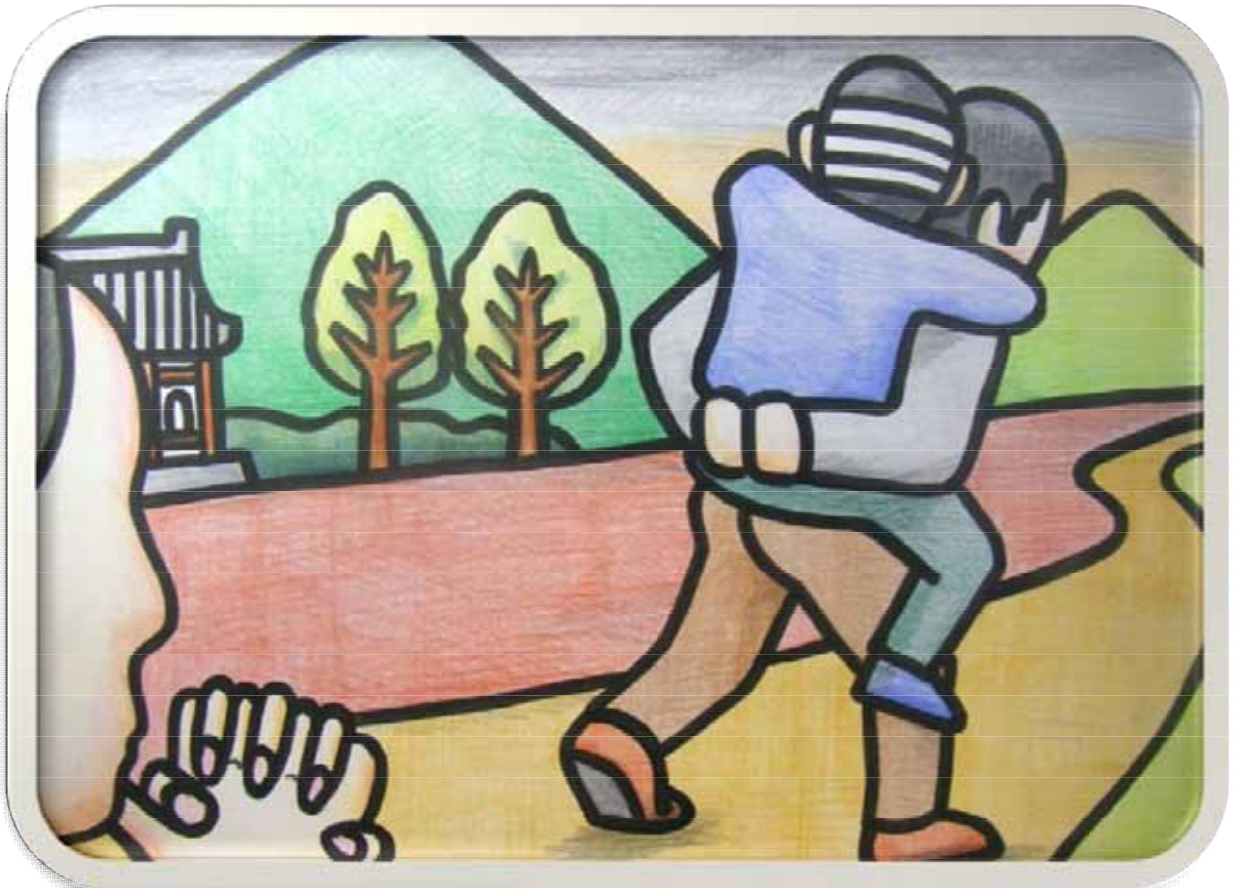
まったくなげなく、編棒をもった手を、ふりあげたとたんに、

もう、このおそろしい出来事が、

おこってしまったのである。

かけつけてきた、順一の母は、

ただおろおると、泣くばかりであった。



順一は、シズの父におぶさって、
さっそく十五キロも北にある、町の病院へ、
つれていかれることになった。
その順一のうしろすがたが、

土橋^{どはし}のむこう森かげにかくれてしまい、
あつまっていた人たちも、
みんなかえってしまっただが、シズは、
やっぱりやけつくような眼つきをして、
遠いところをみつめながら、
じっとつっただきりだった。

おそろしく、「う」へきていたみんなは、

シズを、あんなひどいことを、しておきながら、

泣きもしないし、あやまりもしないで、ぷすんとすねている、ひねくれもの、いやな子だと、思ったにちがいない。

みんなの、シズをみていた眼には、たしかに、

そういう非難が、つめたく光っていた。

だが、もちろん、シズは、

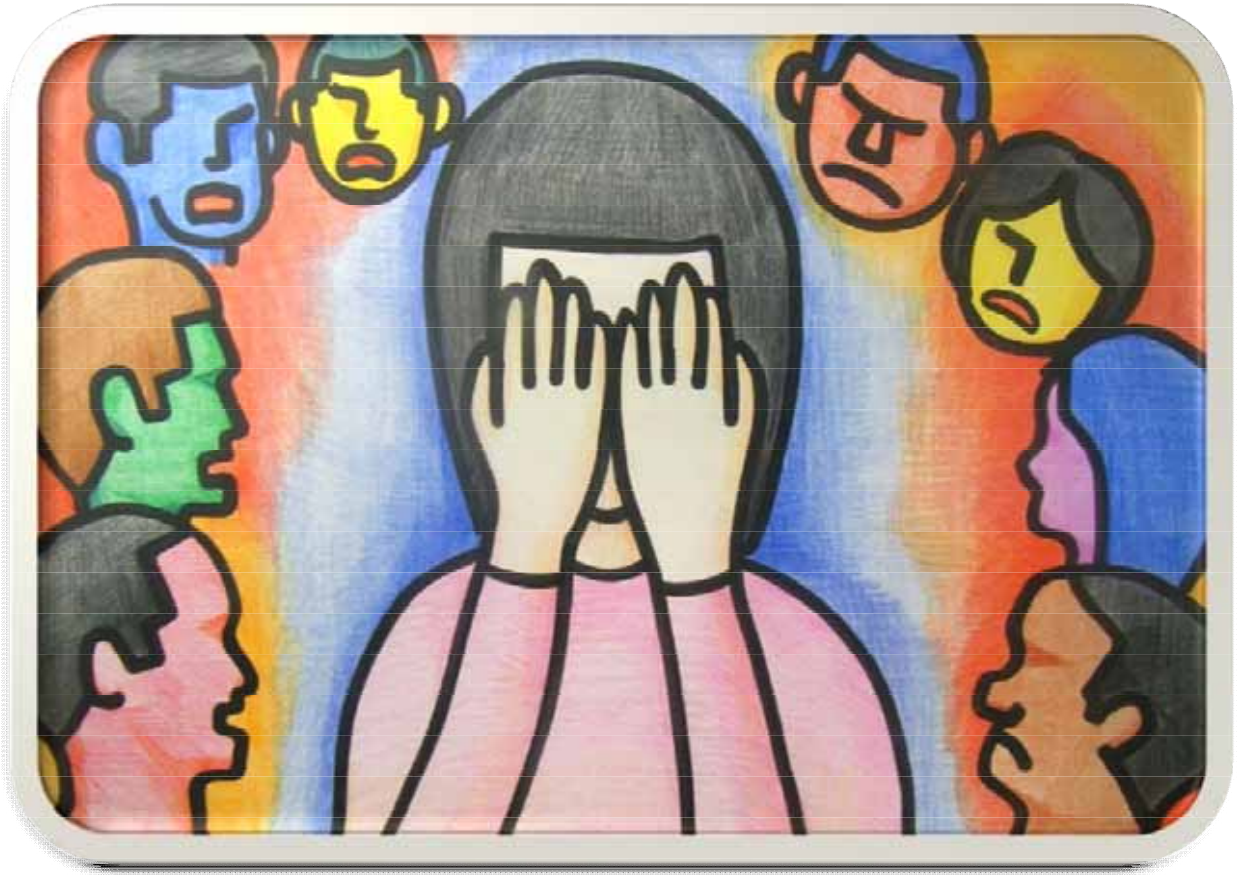
すねているのでも、ひねくれているのでもなかった。

それどころではないのだった。

べんかいをして、

どっちが、どれほどわるいとか、いいとかという問題では、ないのだった。とにかく、

シズのふりあげた編棒で、たいへんなことになったということは、まぎれもないことなのだ。



だが、泣きながらも、ときどき顔をあげて、
こわい顔で、シズをにらみつけた。
となりきんじょの人たちも、
大ぜいあつまってきて、
くちぐちに、がやがやいった。
それらの人たちも、
へんにつめたい眼つきをして、
シズの方をふりむくだけで、だれひとり、
ことばをかけてくれるものも、いなかった。

なるほど、順一の眼を突いたのは、シズにまちがいはない。

けれども、その突いた事情は、そこにいるだれにもわかっていないのだ。だから、シズは、それをいわなければならぬ。

しかし、シズは、なんにもいわなかった。

さわぎの、かたすみの方に、しょんぼりとつたまま、ひとりのべんかもしないで、だまっていた。

ひよっとしたら順一は、

生れもつかぬ、眼の見えない子になるかもしれない。

シズの胸は、ただそのことだけで、

子じかのように、わなわなと、ふるえているのだった。

ほかのことは、なんにもかもわすれはてて、

いきづまるような気持で、はらはらとしているのだった。

そして、なにかこう、いっしょうけんめいに、いのっているのだった。

だから、シズは、いつもとちつともかわらない、やさしい笑いをうかべた、順一のおばあがつえをつきながら、そばへやってきたのに、

ちつとも、気がつかなかった。

「シズよ。」

と、よびかけられて、シズは、ふっとわれにかえって、ふりむいた。



そして、そっぴ、おばあをみつけると、
とっぜん、その胸に、とびついていた。

とびついで、おばあを、
ぎゅっとだきしめながら、かたをふるわせて、
はげしく泣きだした。

泣きながら、シズは、

「ね、ね、おばあちゃん、もしも、順ちゃん、
もしも、順ちゃんの眼が、つぶれたら、

あたしは、あたしは、順ちゃんの、
およめさんになって、いっしょう順ちゃんを、
だいじにしてあげるわ、ね、ね。」

と、いった。

おばあは、
シズのせなかを、そっとなせてやりながら、
「うん、うん、よし、よし。」
と、やさしく、なんべんも、うなずいた。

病院から、かえってきた順一をむかえる、みんなのうしろで、

ちいさくになっていたシズは、なんだか、まぶしくって、顔があげられなかった。いや、顔があげられなかったのは、

自分の手で、とうとうつぶしてしまった、順一の左眼をみるのが、おそろしかったためかもしれない。

すると、シズをみつけた順一は、すぐシズのそばへとんできて、

「くら、シズベえ！」

と行って、にこにこ笑った。

きつと、おこっていることと思い、ずいぶん心配していたのに、ちっともおこっていないらしいようすはなかった。

それに、つぶれた左眼にいれてある、義眼いれめは、

まるでもとの順一の眼のように、くろぐると、大きく光っているのだった。

シズは、すっかりうれしくなって、あらせいとうの花のように、

あかるく笑いかえすと、すぐ、いつものあまえたこえをだして、

「あのね。」と、いった。



「順ちゃんのおさがりが、

五ひきも、ごどもをうんだのよ。」

「ほう。」

「とつても、かわいいわ。」

まるで、もくれんの花びらのような、

きれいな耳を、よせあって、

えさをたべるのよ。」

「ぼくのすすのあいだ、

だれが、せわをしていてくれたのかな？」

そいつなのだ。

シズは、順一のおのしつもんを、

まっていたのだといわんばかりに、すかすか、

「あたしよ。」

と、こたえた。

そして、ちいさな花よめさんのように、ちよつと、すまし顔をして、「いっしょうけんめいに、かわいがってやったわ。」と、つけたした。

シズは、いっしょうのあいだ、順一のおよめさんになって、順一をだいじにしてあげることが、ただの責任とか義務とかだけでなく、なんだかほんとうの幸福のような気がした。

そして、そのことをかんがえるだけで、もう、心がぬくぬくと、あたたまってくるような感じがするのだった。

ところが、それから二日あとの晩のことであつた。
月夜だつた。

月の光を、いっぱいあびた、ほそながい谷間の村は、
ひるのようにあかるかつた。

父兄会のと きにする、劇の打合せ会があつて、

光沢寺こうたくじで下宿しておられる、先生のところへいつてきたので、

その晩シズは、いつもよりだいぶおそくなつて、

順一の家へ風呂をもらいにいった。

そして、順一のもっている劇集をかりる用事で、

まっすぐに離室の順一の部屋へいったが、電気を消して、順一は、もう、
すやすやとねむっていた。

だが、本のある場所は、よくしっていたので、

かまわずに部屋へはいりこみ、本箱の方へいこうつとして、なにげなく、
ふと、順一の寝顔をみたとき、シズは、

「あつ！」

と、おどろいて、棒だちになつてしまった。



まどガラスから、さしこんでくる、月の光のなかで、すやすやとねむっている順一の顔に、たったひとつの義眼いれめだけが、

きらきらと光って、眼をさましているのを、みたからであった。

すごい。

じつに、それは、

しずかなものすごさであった。

シズは、しらすしらす、あとずさりした。

口のなかで、

「こわい、こわい。」

と、ちいさくいった。

ろっつかへでると、シズほ、あともみずに、走りだした。

（順ちゃんの眼は、いっしょうねむらないで、ああしてきらきらと、光っているのだろうか。いやだ、いやだ、

順ちゃんのおよめさんになることなんか、こわくて、いやだ。）
だがシズは、すぐ、こんなふうにしてにげている自分が、
いっそういやだと思った。

あんなにかたく決心していたことが、たったそれだけのことで、
くたくたつと、くずれてしまったよりなさが、
どうにもたまらない気持がするのだった。

しかも、自分は、あの眼をつぶした、下手人ではないか。
それを、こともあるうちに、こわいなどといって、にげだすなんて、
あまりにもかつてすぎるふるまいではないか。

シズは、きよねん、死んだ、みつねえちゃんのことを、思いだした。
その順一のねえちゃんは、およめいりすると、すぐに、

せきずいカリエスになって、そのために、かえされてきたのだった。

ただ、たまたま、そういう病気になったという理由だけで、夫婦というような、たいせつな関係が、かんたんに、とりやめになり、まるで品物かなにかのように、平気で、かえしてきたりする、このふしぎな、おとなの世界のできごととに、

シズは、順一といっしょになって、どんなに腹をたてたことが、かえしてきた、むこうの人たちのことを、悪魔みたいな人間だと、ひどくののしつたことをおぼえている。

たしかに、それは、そうにちがいない。

だが、そういうむこうの人のことばと、いまの自分の心とは、いったい、どれだけちがうと、いえるだろうか。

ちつとも、ちがいはしないのだ。

シズは、くちびるを、かみしめて、そつと台所へでていった。

そして、まっけていてくれたおばあといっしょに、風呂にはいり、いつもしてやっているようにおばあのをせなかを、ながしてやった。

せなかをながしてやっているうちに、シズは、きゆうに、胸がいっぱいになって、がまんができなくなった。

シズは、ながすのを、やめると、うしろから、しっかと、おばあにだきついて、そのはだに、ほおをおしつけ、しくしく泣きだした。

シズは、さびしくって、しょうがないのだった。そのなんともいいようのない、さびしさを、どうしていいかわからないのだった。

おばあは、むこうをむいたまま、しずかにたずねた。

「シズよ、なぜ泣くんだね？」

「こわいのよ。おばあちゃん、あたし、こわくてたまらないの。」

「なにが、そんなに、こわいんだね。」

「あのね、あの。」

シズは、泣きじゃくりをしながら、うそをいった。

「さっきね、劇のことできてきた、光沢寺のスピッツね、とっつてもこわい眼をして、あたしを、にらんだの。」

「なんだ、そんなことを、思いだして泣いているのかい。」

おばあは、歯のぬけた口を、ねずみのようにほそくして、笑いながらいった。

「もう泣きやむんだよ。シズは、いい子だからね、ね、ね。」